

## 「漢字を“手”で書こう」

福井市足羽中学校 3年 面 悠斗 (おもて ゆうと)

私は、漢字が大好きです。保育園の頃にクイズ番組で漢字に出逢ってから、漢字の勉強を始め、中学一年生の時に漢検二級に合格しました。現在は準一級合格に向けて日々勉強しています。

そんな私が、日常生活の中で気になったのは、友人や家族の「漢字は読めるけれど書けない発言」です。しかもそれは、日常でよく見かける、使われる漢字に対する発言です。確かに、クイズ番組の漢字のコーナーでも、読みの問題はスラスラ解けるが、書きの問題になると手が止まる、という光景をよく目にします。このままでは、どんどん漢字を手で書かなくなり、いずれ漢字を使わない世の中になるのか、大好きな漢字がなくなってしまうのか、と思うと少し不安な気持ちになります。

そこで、漢字に対する世の中の人々の気持ちや意識について調べてみました。すると、文化庁の令和三年度「国語に関する世論調査」で、「情報機器の普及で言葉や言葉の使い方が影響を受けると思う」と答えた人のうち、その影響に「手で字を書くことが減る」「漢字を手で正確に書く力が衰える」と思っている人が、ともに90%近くにのぼっていることがわかりました。確かに手書きで文章を書くよりも、パソコンやスマートフォンで文章を打ち込む方が数倍も速いですし、漢字や熟語の読み方を入力すれば、予測変換から選ぶだけで済むので漢字の間違いも減ります。この時代、漢字が読めれば書けなくてもいいのではないのか。そう思うと、周囲の人がいう「漢字は読めるけれど書けない」という発言にも納得できます。

では、なぜ学校では漢字を学ばせる際、書き取りも重点的にやらせるのでしょうか。これからも、スマートフォンやパソコンなどの情報機器は発達していくのだから、漢字の読み方とその意味、予測変換から選ぶときに気をつけるべき、同音異義・同訓異字だけ学ばせれば、それでいいのではないのでしょうか。

実は、このことについては、平成二十二年度の「文化審議会答申」で既に指摘されています。情報機器の利用が一般化する中で、漢字を手で書くことをどのように位置づけていくか、「漢字の習得及び運用面とのかかわり」「手書き自体が大切な文化である」という二つの面から整理していく必要があるとして、情報機器の利用がさらに日常化・一般化しても、小・中学校で漢字の書き取りを行うことが必要であると示されているのです。繰り返し漢字を手書きすることで、視覚、触覚、運動神経などさまざまな感覚が複合的に関わり、脳が活性化されるとともに、漢字の習得に大きく寄与するのだといいます。また、習得時の書き取り練習により、瞬時に、漢字を図形のように識別できるようにすることで、複数の変換候補から適切な漢字を選択する能力も得られるといいます。やはり、いつの時代も、漢字を手で書くことが重要であるといえるのです。

私は、漢字の習得に書き取りが欠かせないということ以外にも、理由があると考えました。それは、「手書きの文字にはその人の感情や気配が乗る」ということです。自信満々に大きく書いた字、急いで書いて少し崩れた字、怒りに身を任せた乱暴な字…。手書きの文字からは、書かれたメッセージ以外にも、書いた人の感情やその時の状況がありありと伝わってきます。これがスマートフォンやパソコンの文字にはない、手書き文字の良さなのです。

漢字は、ひらがなやカタカナ、アルファベットなどの「表音文字」ではなく、「表意文字」です。一つ一つの文字に意味があり、個性があります。一文字一文字が、いわばアニメや漫画のキャラクターのようなものです。私はそんな漢字が大好きです。みなさんも私のように漢字に親しみをもってほしいです。

また、漢字は日本の文字の起源です。古代中国から漢字が日本に伝わり、そこからひらがなやカタカナが生まれました。そんな日本文化の源を絶やすわけにはいかないのです。

ということで、みなさんも私たちのように手書きで文字を書きましょう。友人や家族への手紙でも、一日を振り返る日記でもいいです。もし、途中で手が止まり、漢字を調べることになったら、それは、もう一度漢字を書く力を鍛え直す機会だと捉えてほしいと思います。